

最後に、仏教とフェミニズムの豊かな結びつきについての一端を示したい。ある女性仏教徒は、仏教がフェミニズムに貢献し得る可能性について語ってくださった。それは、女性としてのどのような苦しみを抱えているか(苦諦)、その原因は何か(集諦)、その問題が解決された状態はどのようなものか(滅諦)、解決の方法は何か(道諦)、という「四諦」に基づく思考法である。いふなれば、女性と仏教をめぐる現代的課題の見取り図を描くことを試みた本発表は、「苦」と「集」の作業である。また、性差別的言説の典拠を否定したうえで示されるジェンダー平等な仏教観やそれが実現した未来は「滅」、そして女性仏教徒たちの実践的な試みは「道」として捉えることも可能だろう。女性仏教徒たちの既存仏教への異議申し立ての試みは、優れて仏教的な営みともいえるのである。

世界遺産のオーセンティシティ概念と神仏習合

中西 裕 二

現在、日本では多くの寺社がユネスコの世界文化遺産として登録されている。だが、世界文化遺産に登録されている神社、宮を見る限り、それらの多くが中世的な神仏習合、本地垂迹思想、そして寺社勢力と関係するものの、世界文化遺産関連の文章においてこの点への言及が非常に乏しい。

世界文化遺産へ登録される文化財は、そのオーセンティシティが最も重要とされる。しかし、このオーセンティシティ概念

は、登録される文化財が歴史的に「本物」であるかどうかの指針に過ぎず、文化のオーセンティシティ、あるいはその文化主体をユネスコが考慮・判断する訳ではないからである。この登録は、あくまで「もの」中心主義であり、その文化的主体がユネスコのレベルで問われることはない。

世界文化遺産に登録されている神社、宮の、かつての宗教主体は寺社勢力であり、それらの施設は、かつての寺社勢力の換喩的象徴であると言える。だが、宮が神を、寺が仏を祭祀する施設であるという「もの」中心主義の視座でいえば、仏／神・外来(non-nation)／土着(nation)・仏教／神道という隠喩が成立する。中世の神仏習合的世界観は、この図式においては一時期の「混淆」を示す形態であり、かつ双方の主体がnation概念に収斂される、つまりその文化的主体は日本人であるという近代的な概念にすり替わることで、主体としての寺社勢力は不問に付される。だが問題なのは、現在に残された施設(社殿など)は、古代的祭祀の遺構でも、近代的な神道概念をもつ集団が主体となり建造した施設でもないという点である。しかし、近代的な仏／神の二分法(＝創られた伝統)が世界遺産にも適用されることで、近代的な宗教図式が世界遺産の文脈で再生産されているといえる。

これは、具体的な「もの」のレベルでは、実は神仏習合は見えにくいという点とも関係するだろう。例えば、神仏習合の理念を表す具体的な建築様式などはない。従って、「もの」を中心と考えれば、おのずと上記の図式での説明が妥当ということになる。

また、仏教と神道という二つの軸(『近代的な宗教概念』の設定は、世界遺産登録に必要な文化の「普遍性」と「土着性(地域性)」に容易に対応させることができる。従って、日本の仏教と神道をめぐる近代的概念は、世界遺産の理念にむしろ適合的であると言えよう。

世界文化遺産に登録されている神社、宮は、外国人観光客も訪れる一大観光地ともなっている。そこを研究する、人文的な研究者側は近代の脱構築に向かうが、世界文化遺産の現場は、世界文化遺産という「お墨付き」を契機に観光振興を目指す傾向にある。だが、観光の現場で消費されるのは近代の宗教的図式であり、それを乗り越えようとするアカデミズムの成果は、観光の現場には反映されない。むしろ観光の現場は、モダンとポストモダンの断絶を表しているかのようにも見える。

二大霊場巡拝者の実態

——四国と西国を比較して——

柴谷 宗叔

四国八十八ヶ所と西国三十三所の二大霊場について巡拝者の実態を調査した。その結果、四国遍路は大別して三つのタイプに分かれること、西国は四国に比べ観光的要素が強く、徒歩巡拝はほとんどないということなどが裏付けられた。

巡拝者がどこから来ているかを見ると、四国遍路の場合、全国的な広がりを見せている。地元四国からが二二%だが近畿からが三〇%とこれを上回り、以下、関東一四%、中部一一%、

中国八%など。西国は地元近畿が六六%と三分の二を占め、中部が二〇%で三十三番札所が岐阜県で中部に在ることを考えれば、なんと八六%が地元で占められていることになる。全国区の四国、地方区の西国という差が現れている。

四国について地域と日程の相関をみると、地元四国の人たちは車の日帰り、家族、知人など小グループで巡拝する。近畿、中部など中距離地区からは団体バス(あるいは車)の区切り打ち。関東以遠の遠距離地区からは徒歩(か公共交通機関利用)の単独行動で通し打ちというスタイルが多いことがわかった。西国では日帰りが七五%を占め、地元近畿の人が車の日帰りで回っているという構図がわかる。徒歩は〇・三%(実数二)で誤差の範囲でゼロに等しい。

動機(複数回答)は四国、西国ともに過半数の人が先祖等の供養を挙げ、近しい人の死が遍路にかきたてるという構図が浮かび上がる。観光目的は西国が二〇%、四国が九%で、西国が四国の二倍以上の比率となっているのが特徴だ。プロフィールを見てみると、四国、西国ともに六十歳代が四割以上を占め、定年退職後に巡礼に出るというケースが多いという図式が浮かび上がった。調査は二〇〇四年から二〇〇五年にかけ、各二千枚のアンケート用紙を配布。回収率は四国二五・二%、西国一四・二%。

西国ではなぜ徒歩巡拝が廃れたのか。これは鉄道の発達と大いに関係がある。一八七四年以後、関西圏には鉄道網が張り巡らされていく。都市間を結ぶのみならず、有名な寺社への参詣の便が図られる。現在も公共交通機関が利用できない寺は、ご